裸の裸王様

はらぺこ姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裸の裸王様

【コード】

N2093Z

【作者名】

はらぺこ姫

【あらすじ】

ジャポン国の城下街には、夜中になると素っ裸の男が街を走り回るらしい。

いつの間にもやら彼は裸王と呼ばれ街で有名になっていた。

そして、彼の捕縛には莫大な賞金がかかっていて、それが目当ての賞金稼ぎ達が集まっているおかげで、城下街は栄えている。

当然、城下街警備隊も、捕縛に全力をあげているわけで。

そんな裸王と警備隊長のお話。

城下町の酒場にて（前書き）

あまり深く考えないでください。
考えたら…多分負けだと思えます。

城下町の酒場にて

いらっしやい。

こんな夜中に若い娘さんが珍しいね。

わしにも丁度あんたくらいの娘が居るんだけどさ、お嬢さんは他国の人がい。

だったら、わしが父親代わりに忠告しとくよ。

この城下街では、夜中に素っ裸の男が町中を走り回ってるから、若い娘さんは外に出ないほうがいい。

え？裸王の話なら知ってる？裸王捕縛の賞金目当てに来た魔法使いで、素っ裸の男なんか簡単に捕縛できる？そいつは頼もしい。

うちのカミさんですら、遭遇したくないから夜は外出しないんだがねえ。

何？女はいくつになっても恥らう乙女だって。

なるほど、そいつは知らなかったよ。

でも、お嬢さん、あいつのピア樽のような外見を知らないから言えるんだよ。

あいつを見たら、さすがの裸王も裸足で逃げ出すと思っただけだなあ。

うおっと。奥の台所から包丁が飛んで来た。アブねえ、アブねえ。

そうそう、お嬢さんが賞金稼ぎなら、まず、警備隊の詰め所で、許可証を貰うことをオススメするね。

お嬢さんだって、追いかけている最中に、警備隊の尋問受けたくないだろう？

それに許可証があれば、あちこちで裸王の情報提供してもらえるからな。

なんで、そんなに良く知ってるかって？

実はこの酒場に居る連中は皆、お嬢さんみたいに裸王捕縛の賞金目当てで滞在しているからさ。

ま、わしらにしたら、裸王様のお陰で商売繁盛、ありがたい存在なんだがねえ。

おっと、お嬢さんにそんな話はまずいな。

それよりか、なんで素っ裸の男が簡単に捕まらないか知りたくないかい？

もうそろそろ酒場に飲みに来る警備隊の奴らがくる時間だからな。

お、噂をすれば丁度いいところに。

誰か、このお嬢さんに裸王の話をしてやっておくれ。

隊長のつぶやき(前書き)

一応、主人公の登場です。

隊長のつぶやき

第3警備隊隊長である俺は、引き継ぎを終えた後、隊員達の待つ会議室へ向かっていた。

夜間担当の今日は、裸王と遭遇するチャンスであり、裸王を捕らえることが出来る日だ。

「隊長、お疲れ様です」「

副隊長を筆頭に隊員達が挨拶したところで、俺は本日の予定を地図を指差しつつ指示を出す。

「前回シュミレートした通り、A班とB班は、まず、第3地区に現れるであろう奴を大通りに追い込んでくれ、C班は、大通りに罠の設置し、追い詰めた奴をA、B班と、共に取り押さえる。D班、E班はその他の地区を巡回。もし奴がその他の地区に逃げ込んだ場合に備えて散らばっておけよ。詳細な部分は各班長に任せるが、何かあったら俺は大通りにいるから指示を仰げ。そうそう、最後に、裸王を捕らえるのに夢中になって、他の犯罪を見逃すな。そのときは、文字通り俺達の首が飛ぶからな。判ったところで、解散！」

隊員たちが散ったところで、俺も夜の街へゆっくりと歩いていった。裸王には、彼なりのルールがある。

1、夜間担当の隊の地区にはじめに現れる。

俺達警備隊には、7つの部隊があり、それぞれ、城下町と同じ地区

に寮、もしくは住処がある。

例えば、俺達第三部隊は、第三地区に居住しているといった感じだ。

2、夜間10時から2時の間に現れる

理由はよくわからないがその時間に出没する。

3、裸王といっても本当に全裸ではない。

世間では、素っ裸のイメージ（そのほうが面白いから）な彼だが、実は一応、真紅のマントを羽織っている。

顔は羽マスクをしているので判らないが、スキンヘッドの2メートルを超えるマツチヨな男であることは間違いない。

ついでに、賞金稼ぎが来るようになってから、真っ白なふんどしをつけている。（確認済み）

要するに、俺達をおちよくっているのか自信の表れなのか。だが、上司から逮捕状が出ている以上、捕まえなくてはいけない。

賞金稼ぎに捕まったとあれば、俺達の沽券にも関わる。

さあこい。今日こそ俺が捕まえてやる！

本日の捕獲劇 その1

俺は、大通りにつくと、胸元から眼鏡を取り出す。

これは魔道具で、送信された画像を受け取ることが出来る、要するに、各班長もかけている眼鏡から見た映像がそのまま俺のかけている眼鏡で見ることが出来るという便利な代物だ。

おまけに、夜間でも昼間と変わらない状態で見ることが出来る。

最もこれは、試作品のため、一般には流通していない。

魔道具、というのはこのジャポン国の産業のようなもので、世界一のシェアを誇っている。

俺達のような魔力のない人間が使うことが出来るという利点があるものの、中に充電されている魔力が消費されてしまうと、新たに魔力を補充しなければいけないというのがネックで、お金のある人向けな感は否めないが。

最も、王宮付きの魔道具を専門に研究している奴らが開発しているため、俺達はモニターも兼ねて色々魔道具をつかうことが出来るりする。

「隊長、現れました」

同じく魔道具の通信機（ちなみにこちらは世界中で愛用者が居る）、から声がする。

「よし、作戦決行だ！」

声のした人物からの映像に切り替えると、赤い塊が、屋根から屋根を蚤のようにびよんびよん飛んでくるのが見える。どうやら、後ろを何人かの賞金稼ぎが追っているようだ。

しばらく飛び回った後、比較的開けた公園にある英雄の像の上に、彼は降り立った。

「ふはははははは、今日もカーニバルの開催だ！！！」

赤いマントをはためかせ、マッチョな肉体を見せ付けるように誇示しながら、ポーズをとり続ける彼に向かって、何人かの魔法使いが攻撃魔法を繰り出す。

地響きのような爆発音と、白い煙がもうもつと上がった。

「君達、備品を壊しちゃあ駄目だよなあ」

白い煙の中から、クククとのどを鳴らすように笑いながら、裸王が現れる。

彼のふんどしが白く光っているのは目の錯覚ではない。

神の加護とか、精霊の祝福とか呼ばれている類の布だ。

これは、魔法攻撃を無効化することが出来る。

ついでに言うと、俺達の制服もこの布が使われているが、ある一定以上の面積がないと全身を保護してくれないのが難点だったりする。

ちなみに彼の場合、その面積はどう見ても全身を保護するには足りていないので、ふんどしで受け止めたとは思えない。どうやったのかは謎だ。

「悪い子にはお仕置きが必要だよなあ」

裸王が魔法使いに向かって歩いていく。

途中、裸王に向かっていく剣士っぽい賞金稼ぎが何人か、接触する前に吹っ飛ばされた。

裸王は、独特な体術が得意らしい。これも実証済みだ。

そして、魔法使いの首根っこを捕まえると、頭に頭突きを食らわせた。

「他に、悪い子はいねえか？」

おそらく、これを見ている俺に向かって、裸王は、悪の首領そのままの笑顔で、ニツと笑った。

本日の捕獲劇 その1 (後書き)

裸王、登場。

裸王は派手なことが好きです。

本日の捕獲劇 その2（前書き）

このお話の世界観は、混ぜすぎカオスです。
都合のいいように解釈してください。

本日の捕獲劇 その2

裸王がニツと笑った映像を最後に通信は途絶えた。

打ち合いにすらならず、当て身を食らわされたか。

彼にはもう少し訓練が必要だな。

映像を別視点に切り替えると、丁度、大通りに向かって走っているようだ。

確かに、大通りに追い込めとは言ったが、逃げるのか？

まてよ、B班長は走るのが得意だったはず。おまけに、B班は走り込みをしていたな。

これも、作戦のうちか？ある意味、その判断は正解か？

俺が心の中でボヤいていると、大通りの一歩手前で裸王が待っていた。

どうやら先を越されたらしい。練習の成果がでなかったのか、裸王が強すぎるのか。

「君、敵に背中を向けるとはどういうことかねえ」

裸王が両手を空中でニギニギしながら寄って来る。

ま、まさか！

俺の予感は的中する。とっさに通信機を切り替えて正解だった。

何故なら、B班長の大爆笑を耳元で聞くはめになっていたからだ。

B班も全滅か。

と、なると次に現れるのは残りC・D・E班3つのうちのどの班だ？

一旦、罨を仕掛けている、C班を見るべきか。

C班では、丁度罨を仕掛け終えたところのようだ。

というか、何故、獣用の檻？で？？？

「C班長、それは何だ？」

餌に吊るそうとしている本を見て俺が尋ねると、どこかのんびりとした声が返ってくる。

「隊長、これはこの前発禁になったあの先生の本ですよ」

なぬ！あまりに内容が過激すぎて発禁になった、あれか。

俺自身は、いまいちリアリティにかける絵は好みではないのだが、一部マニアには大うけしているシロモノだ。

それを手に入れたC班長もすごいが。

「そんな本で、釣れるのか？」

裸王が格闘マニアなのは知っているが。

「隊長、知らないんですか？去年、とある市場で裸王のコスプレが流行ったことがあった

でしょう？あの時、本物の裸王がいたんですよ」

そういえば、年に数回、第三地区で行われている、趣味で作った本やら衣装やら武器やら売る市場で、裸王のコスプレが流行ったことあったな。

そのときは、俺達の制服のコスプレもいたりして会場がかなり混乱した。

本物が居たのか。てっきり噂だと思っていたが。

「やるな、C班長」

俺がねぎらったところで、慌てたような別の声が入り俺はそちらに通信を切り替えた。

本日の捕獲劇 その2（後書き）

警備隊は、一応班ごとに得意分野があります。

A班 暴力事件などが得意

B班 強盗、掏りなどが得意

C班 情報、分析を扱うのが得意

D班 喧嘩やトラブルの仲裁が得意

E班 子供や女性、年寄りへの対応が得意

本日の捕獲劇 その3

「隊長！裸王がこっちに向かって突進してきます！」

その相手は、D班長だった。

映像を切り替えると、第一地区と第二地区方向にメイン通りを突っ走っている裸王の姿を捉えることが出来た。

心の中で軽く舌打ちをする。

実は、俺が居るのは第五地区と第六地区のメイン通路。

C班が罫を仕掛けているのが第三地区と第四地区のメイン通路だったりする。

判りやすく言うならば、俺の居る大通りとメイン通路の交差点から二つ向こうの交差点を彼が通過するはずである。

俺が眼鏡を外すと、丁度大通りの彼方で、赤い米粒大の塊が通過するのが見えた。
時間は12時。

よし、あの手を使うか。

「E班長、聞こえるか」

しばらくの間がありE班長から返事がある。

「はあい、隊長お。なにか指示ですかあ」

ちなみにE班の班長は女性だったりする。

「今、丁度裸王が第二地区に向かっているんだが、行けるか？」

周りでにぎやかな声が聞こえ、

「大丈夫ですよお。魔法使い何人が確保しましたあ。転送でえ、すぐに行けますよお」

あの様子では、彼女に下心のある賞金稼ぎの団体が現場に向かうな。

「じゃあ、頼む」

そして、そろそろ回復したであろうA班長に、D班長の持ち場へ向かうように指示を出した。

俺は、E班長が足止めをしてくれることを願いつつ、現場に向かう。

途中、C班とすれ違う。

「隊長！落とし穴に気をつけてください！！」

それぞれ落とし穴の位置を指差してくれていたの、それをよけていく。

うー。思ったより時間をロスしてしまった。

そして、現場に到着していた俺を待っていたのは。

周りにブリザードを撒き散らしながら固まっているD班長と、周りに放射線状に倒れた賞金稼ぎの上で、用の鞭で縛られて吊るされたE班長の姿だけだった。

「隊長お、助けてくださああい」
「どうやったら、こんな縛り方が出来るんだろっ。」

複雑に縛られたE班長の拘束を解いてやる間に、事情を聞きだした。

「あたした時にはあ、丁度裸王がD班長にい、愛の告白をしていたんですよう」

へっ？信じられない俺に向かって、頬をぷうと膨らませながら、E班長が続ける。

「だあってえ、あなたのことはずっと好きでした。なんていいながらあ、D班長のどこが気に入ったか、延々と話していたんですよあ、あたし、鳥肌立つちゃいましたあ」

身振り手振りで状況を伝えて来るE班長を見ると、D班長が凍っていた訳に納得がいった。

「で、E班長は？」

E班長の顔が、心底嫌そうな顔になる。

「あたしだってえ、一応隊長ですよあ。捕獲しようと思いましたあ」

結果、鞭を取り上げられ、その鞭で賞金稼ぎを倒し、縛られたのだという。

「そうか」

時間を見ると、もう二時を回っていた。

色々な意味で疲れていた俺は、報告を終えると家路についた。

そのときには、すっかり忘れていたC班だったが、朝になって大通りで、市場の商品を並べようとした街の人たちに見つかり、大笑いされたという。

どうやら、俺達が話している間に、裸王に落とす穴に頭を出した状態で埋められ、班長は、檻の中に入れられたらしい。

とりあえず、C班長には全力で謝っておこう。

本日の捕獲劇 その3（後書き）

大体、大通りを端から端まで全力で隊長が走ると、1時間ぐらいかかります。

ついでにというと、街の道は碁盤の目のようになっています。

隊長の休日

昼過ぎに目覚めた俺は、寮にある共同の洗面所に向かう。

そこに、丁度泥まみれにまっただC班が帰ってきた。

「隊長。ひどいっす」

そのときになって、ようやくC班を忘れていたことを思い出した。

「すまん。裸王がそっちにも現れたのか」

そういえば、C班から連絡なかったな。

「連絡しようにも、あつという間でしたし、身動きが取れなかったものっすから」

自分達の作った罠を逆に利用されるとは。

「そうか。まあ、今日は休日だ。詳しいことは明日でも聞く」

C班は、浴室のほうに消えていくのを確認すると、俺も身支度を整え、町のほうに出かけることにする。

「久しぶりに、買い物にでもいくか」

第四地区は店が多く、買い物をするには最適の場所である。

俺の住んでいる第三地区がマニア向けなのは雰囲気からして違う。

途中、大通りの出店で軽く昼食を取っていると、丁度巡回中らしき第一部隊の隊長と出会った。

「お。第三部隊の隊長。昨日の成果はいかがでしたか？」

絶対知っているくせに聞いてくる。

第一地区は貴族の屋敷が多く、隊員も貴族出身者も多い。

当然、性格は推して知るべしだ。

「てるてる坊主？よりはマシって程度だ」

この前の第一部隊の夜勤のとき、隊員全員マントを縛られた上、てるてる坊主のように吊るされていたらしい。

ついでにというと、隊ごとに制服が違う。

それぞれの地区で服をデザインしているからで、自分達の地区のイメージをモチーフにしたデザインである。

それは、同じ青の布から出来ているとは思えないほど、それぞれ個性的で。

その分、自分達の制服にはそれぞれ思い入れがある。

その制服で遊ばれたということは、かなり屈辱的だったはずだ。

ぐっっ、とこぶしを握り締めた、第一部隊の隊長だったが。

「そういえば、あなたのところの男性隊員は、裸王に告白されたらしいじゃないですか。やっぱり、日ごろからの行いの差ですかねえ」
くっ、痛いところを。

「警備隊であるからには、男女関係なく親しまれるのが大事だからな」

とりあえず、強がってみる。

「おや？あちらにいらっしやるのはそちらの隊員では？噂をすればですかねえ」

こんなときに、出てくるなよ。

向こうから、何人かの女性に囲まれてD班長がこちらに来た。

「隊長？それに、第一隊長もどうしたんですか？」

何も知らない本人は、俺達のところに来てきた。

「いえ、あなたが人気があつて羨ましいという話をしていただけですよ」

微妙に違つたろ！と突っ込みたいところをぐっところえ、俺も適当に頷く。

「レオン様、それは少し違いますわ」

D班長の後ろにいた女性が第一隊長に抗議する。

「どづいことです?」

おいおい、女の人にはその笑顔かよ。

「私達はセリオ様に、裸王様が恋のキューピットだと申し上げていたところですよ」

俺の頭の中を、頭に輪っかと羽をつけた裸王が、高笑いしながら走り去っていった。

多分、第一隊長も同じらしく、隣で固まっていた。

「どづいことだ?」

やっこの思いで、それだけたずねる。

女性は、少し戸惑った後、

「えっと、その、第三隊長様、最近、女の子達の間で、裸王様に恋のお願い事をする、想いが通じるって噂があります。昨日もこの子が裸王様に手紙をお渡したら、さっそくこうやってお返事がいただけ。丁度私達もこの子のことが心配で一緒に居ただけですけど。でも、お邪魔なようですので、帰ります」

そういつてさわやかに去っていく彼女達を見送るD班長と恋人になつたらしき娘を見やる。

「もしかして、昨日の手紙は、裸王にもらったやつか?」

一応、念のため確認すると、娘は頬を染め、D班長は頷いた。

「最初は、裸王からの手紙だと思ってびっくりしたんですよ。でも、手紙を読んだらこの子のものだと判つて。で、丁度友達と居たところで返事しました」

隣で、別の意味で第一隊長が固まっている。

「そうか。ま、仲良くやれ」

そういう俺も、気が抜けた。

うれしそうに手を繋いで歩いていく二人を見ながら、隣の男に声をかけた。

「なあ、最近うちの隊員に彼女が出来たやつ多いんだが」

「うちもそうですよ」

「お前は？確か独身だっただろ」

「そちらこそ」

二人の間にしばらく気まずい雰囲気の流れ、お互い何事もなかったように別れていった。

悔しかったから言わなかったが。

俺なんて、女の子に名前すら覚えられていないんだぞ。

翌日、ぬれた枕をひっくり返したのは、俺だけの秘密だ。

隊長の休日（後書き）

やっと名前が出せました。

地獄の訓練日 その1

休日の翌日は、訓練日だったりする。

午前中、全員で夜勤のシュミレーションを行い、それぞれ自分達の弱点を見つけていく。

そこで、新たな対策を練り、それに伴う訓練を午後より行うのが通例だ。

俺達にとっては苦痛でしかない訓練日だが、それを喜んでいる人物が一人だけ居る。

それは、俺達の一番上の上司、将軍である。

なぜ、一番上の上司が出席するのか、まず、その経緯から説明すべきだろうか。

きっかけは、素っ裸で街を走り回る男がいるとの通報からだった。

元々、街は自警が普通で、警備隊というのは存在しなかった。

ゆえに素っ裸で走り回る男より、もっと凶悪な犯罪が横行していた事もあり、その通報は放置されていた。

ところが、ある朝、城の正門の前で、素っ裸に縄をぐるぐる巻きにされた男達が十人ばかり、吊されていた。

事情を聞いてみると、その男達はスリの一団で、裸王と名乗る男に

身ぐるみ剥がされて、ここに吊されたと言つ。

よほど怖い思いをしたのか、男達は助けてくれ。と、懇願してきた。とりあえず保護された彼等は、後日、隠密部隊へ引き取られた。

今度は、城に繋がる川の中央で男達が繋がれていた。

助けられた男達に話を聞くと、やはり裸王が、彼等をここに置き去りにしたらしい。

どうやら、彼等は、強盗だったらしいが、同じく保護された後、軍隊に引き取られた。

その話を聞いた將軍が、軍部の直轄に警備隊を結成し、七ツの部隊に分け、定期的に街を巡回をする事となる。

その時の將軍の一言が隊員達を奮起させた。

「裸王に負けたら情けないのう」

そのおかげか、犯罪がどんどん減り、それを他の地域の領主達もマネをし始め、今ではジャポン国は、世界でもトップクラスの治安の良い国にまでなった。

そうなってくると、全裸で走り回る男の存在はいかがなものか、という議論になってくる。

早速、將軍は裸王捕獲を警備隊に命じた。

簡単に思えた捕獲は、なかなか実現されなかった。

その状態を面白がったのが、お金のあふる貴族達である。

何故、たかが全裸で走り回る男に躍起になるのか。

憶測が憶測を呼び、最後には賭けにまで発展したのだ。

裸王が捕まる方が得になる人達も多く、個人的に人を雇う者も現れた。

余りの加熱ぶりに、国王が議会で釘を刺したほどである。

それに対して、裸王に対するルールと、捕獲したものに賞金が付いた。と言う訳だ。

そのルールを守らない限り、賞金が出ない。と、いうことは、裸王が捕まらない可能性に賭けている方にも都合が良く。

おまけに、勝った場合、賭けた金額の最低倍になるように、差額分は將軍が持つと言い出したため、賭けの参加者が一気に増えた。

今では、専門の部署が出来たほどである。

その部署は、国の管轄のため、年に一回清算してくれる。

それがかえってよかったのか、年末の風物詩として有名になってしまった。

有名になった分、警備隊を作った將軍も当然注目の的な訳で。

関心がある所をみせるために、週に一回の訓練日にはかならず参加するといっわけである。

俺達には、週に一回でも、將軍にとつては、毎日どこかの部隊が訓練日にあたるため、そういう意味では、多忙であろう將軍が、二時間ほどの午前中だけとはいえ、出てくるということは十分な価値がある。

かといって、俺達には厳しい時間であるのは間違いないが。

地獄の訓練日 その2

中央の円卓には、街の模型が置かれ、椅子には將軍と俺、各班長が座る。

隊員達はそれぞれの班長の後ろで整列した。

「まず、A班長、話してくれ」

俺の進行の元、班長が話はじめ、間に俺の意見を加えていく。

最後に、將軍が口を開く。

「そうだなあ。リキとソウ、立ってみろ」

A班長とB班長が立ち上がる。

「まず、リキに向かって平手打ちでいい、やってみろ。それをリキは避けてみる。ただし、その場から動くな」

B班長の平手打ちは、見事に決まる。

「次は逆だ」

A班長の手は空振り。

「判ったか？」

首を傾げる二人に、俺が代わりに説明する。

「リキは、力重視だからな、その分スピードに欠ける。要するに、隙だらけとも 言える訳だ」

やっと納得したらしい二人に向かって、改めて将軍が指示を出す。

「リキ、ソウを捕まえておけ」

そして、少し周りに場所を作らせる。

「ソウ、逃げ出してみろ」

B班長がもがくも、一向に抜け出せない。

将軍は、俺と代わるように言った。

改めて、A班長の拘束をかせさせる。

何故か、B班長にも俺の拘束に加わるように命じた。

二人分の拘束が加わる。

力では敵わないので、二人に軽くフェイントをかけ、その流れに乗って二人を投げ飛ばした。

と、同時に室内がシンと静まりかえる。

最初にその場の沈黙を破ったのは、将軍の拍手だった。

「見事。やはり隊長だな」

きよとんとしていた部下達も、皆一同に拍手喝采をはじめた。

「さて、次はD班だな」

恥ずかしさをごまかすように俺は続きを促した。

残りの班長の話には將軍は口出して言うこともなく。

「じゃあ、本日の訓練についてだが」

そこで、將軍からストップがかかる。

「いや、今日はわしが指示を出す。A、B班は、軍部との合同訓練。残りの班は、隠密部隊と合同訓練を受けてこい」

指示を受けた皆の顔が青ざめる。

軍部や隠密部隊との合同訓練。

俺も過去に受けた事があるが。

一言で言うなら人間がやる事じゃあない。

武器を持った相手に丸腰で戦うとか、燃える炎の上を素足で走るとか。

そんな怪しげな訓練しかない。

その訓練の後、隊長になるために受けた試験は、一月の間、何も持

たずに山奥で生き延びるといふ実践だった。

こうして、無事に生きていることが不思議なくらいの過酷さだった。

あの時は、たかが隊長になるくらいで、なんでこんな実践を積みまなきやいけないのかと思ったが。

その訓練を受けていたおかげで、火災のあった家から住人を助けることが出来たり、賊のアジトに一人乗り込んで全員捕獲したこともある。

今では、本気であるの訓練に感謝しているほどだ。

地獄の訓練日 その2（後書き）

一応、隊長クラスは普通ならずごい人達なんです。

地獄の訓練日 その3

「三九郎隊長はわしについてこい」

咄嗟に反応出来なかった俺に、将軍が眉をしかめる。

「嫌なのか？」

聞いてなかったとは言えず、俺は首を思い切り振る。

「突然の事で、理解出来なかっただけです」

将軍が、ニヤリと笑う。

「まあいい。今日は、皆の指導ではなく、わしの仕事を手伝うように。以上だ」

これを機に、隊員たちがぞろぞろと部屋を出て行く。

俺と将軍の二人きりになった所で、俺に緊張が走る。

こんな時はどうすればいいんだ。とりあえず、深呼吸？

あたふたしている俺を半ば引きずるようにして、将軍は自身の執務室に連行した。

「この部屋に入るのは、隊長の任命の時以来だよな」

確かに俺がこの部屋に来たのが三年前になる。

「俺、じゃなかった、わたしが問題になるようなことでもしたのでしょうか」

頭がだんだん冷静になってくるに従って、嫌な予感しかなかった。

いったい、何が原因で、將軍に連行されることになったんだ？

思い当たる節がないわけでもないが、將軍に連行されるほどでもない。

「三九郎に問題はないぞ。それより茶でも飲むか？」

辺りを見回すと、將軍と俺以外誰も居ない。

俺の知っている限り、偉い人には、何人が付き人がいるのだが。

その疑問を口にする、將軍は大爆笑した。

「わたしにはそんなもん必要ないわ」

そう言いながら、手早くお茶を入れ、お茶菓子まで出してくれる。

えーと。これは何かの罰ゲームですか？それともパワハラ？

おそろおそろ口に入れたお茶だが。

驚いたことに、今まで食べたもので一番美味しい。

黙々と、お茶と茶菓子を平らげる俺をニコニコと將軍が眺めている。

正直怖い。

「わしの手作りだからのう」

二メートルを越える、野獣の様な姿からは想像がつかないが、この様子だと事実なんだろう。

そうなつてくると、ますます俺が呼ばれた理由が思い当たらない。

お茶の片付けも、将軍が済ませた所で、ノックの音がした。

将軍が俺に素早く耳打ちをする、将軍の後ろに俺が控えたところで、来客が入ってきた。

「将軍、今日のご機嫌いかがかな」

にこやかな笑顔と共に、縦も横も幅さえすべて同じ大きさではなからうか、と思う男が入ってきた。

「ダイ殿、私の機嫌は悪いときがありませんか？」

二人の間に白々しい空気が流れ出ている。

「そうですか。ところで、後ろの男は？」

最初から俺のことは気づいていただろうが、さも胡散臭そうな顔でダイと呼ばれた男が問う。

「うちの部下ですが。三九郎、と申します」

紹介されて、俺は頭を下げる。

「ほう。こうやって傍に置いているということは、目をかけているとみてよいのですか？」

将軍が頷く。

「うちの部下は、皆目をかけております。あなたの末の息子さんも例外ではありませんが？最も、そちらのお子様は皆、優秀ですから」

三番目の息子という時点で、第二隊長の顔が浮かんだ。

あいつの父親らしい。

思い返せば、外国とも取引のある大商人の息子だ、というのは聞いたことがあったな。

「うちの息子は皆、国のために活躍しておりますからなあ。私としても鼻が高い」

まんざらでもない顔でダイは笑った。

「そうそう、そちらの二番目の娘さん、リナさんでしたっけ。そちらのお嬢さんにうちの第一隊長をお勧めしたいのですが」

さっとダイの顔がこわばる。

「いくら将軍の頼みでも、あんな奴の息子にうちの可愛い娘はやれんぞ」

將軍、顔が悪代官です！

「ダイ殿にとっては悪い話ではないと思うのですが。来年には、本格的な姫巫女様の婿選びが始まります。ライバルが少ないほうが良くありませんか？」

ダイの顔が、はっとした顔をする。

「まさか、そういう話が？」

將軍がニツと笑う。

「私が、姫巫女と親しいのはダイ殿もご存知のはずだと思いますが？」

しばらく、ダイが考え込むような仕草をする。

「いや、しかしだなあ」

すかさず將軍が畳み込む。

「では、ごうしませんか？あなたの三番目の息子さん、独身で、今書記官をされてますよね。私が、神官省へ移動の推薦状をお書きしましょう。姫巫女様を口説けるかは、息子さんの腕次第ですが」

要するに、息子を姫巫女の側近に。それが決定打だったらしい。

「そこまでおっしゃってくださるなら娘に話してみましよう」

いそいそとダイは出て行った。

地獄の訓練日 その4

ダイが出て行ったところで、関係ないながらも俺は將軍に聞いてみた。

「あの、姫巫女様の婿選びって？」

姫巫女というのは、ジャポン国にある神殿に居る神告の巫女の娘のことだ。

神告の巫女は、色々なことが出来るらしいが、よく知られている有名なことといえば、俺達の使っている魔道具の魔力を蓄える勾玉を作れることである。

こういうものは、神に仕える巫女にしか作ることが出来ない。

もちろん、他の国に居る別の神に仕える巫女達も作れないことはないが、質、量共に桁が違う。

最も、そのみでその巫女の力を測るわけにはいかないが、その力がジャポン国にとって、利益の要である事には違いない。

今の巫女の時きも、その力を目当てに他国から攻められそうになったほどだ。

それ以上の力をもつと言われる姫巫女の夫ならば、ある意味世界一の力を手中に収めるということで。

彼女は、過去に母親の力を狙われて、ジャポン国が国の存亡の危機

に陥ったときに、まだ、幼少の身でありながら、西の端にある国から東の端にあるこの国に勇者（今の將軍のことである）を連れてきた。

当時、ジャポン国は鎖国状態であり、この国から普通に抜け出すことも入国することもままならなかったのに、だ。

そのとき連れてきた勇者のおかげで、今のジャポン国があるといっても過言ではない。

「ああ、今年、姫巫女様が無事に成人されるからなあ。今、いろいろな思惑が働いているから、悩みの一つでも減らしてやりたくってな」

俺は、一つ聞いてみたくなった。

「あの、將軍は立候補されないんですか？」

將軍だって独身だし、子供向けに書かれている絵本の勇者様は、確か妖精の姫君と結婚したはずだ。

その書かれている妖精の姫君は、実は姫巫女のことではないかと思っっている人も多い。

「わしか？わしはあの子に対しては、兄貴の感覚だからなあ。それに、童話の夢物語を信じてるのは、わしのことを知らない街の人ぐらいだ」

確かに、俺だって、絵本の勇者に憧れた一人だが。

その勇者になりたくて、この道を選んだのも事実ならば、初めて勇者である将軍を見たときに、熊と虎となにか得体の知れないものを掛け合わせたような容貌の彼に、詐欺だ！と心の中で絶叫したのは、俺だけではない事実でもある。

「いや、でもですね」

言いかけた俺を将軍が制す。

それと同時に、ノックの音がした。

地獄の訓練日 その5

丁度入ってきたのは、第一隊長の父親でもある大臣の一人だった。

「おや？第三部隊の隊長がいるとは珍しい」

さすがに彼は、俺のことを知っていたらしい。

「今日は、わたしの仕事を手伝って貰いたいと思ひましてね」

将軍がなんでもないことのように言う。

「うちの息子じゃあ役に立ちませんか？」

さすが父親。自分の息子が気になるらしい。

「いえいえ、そういう問題ではないですよ。ただ、ちょっと彼には、仕事がありません。耳を貸していただけますか？」

耳元で、何事か囁く。

「ほうほう。確かにそれはうちの息子では出来ませんなあ。むしろ彼のほうが適任だ」

しきりに納得している。理由が気になるところだが、命令である以上、黙っているしかない。

「そうそう、この前お話していた件どうなりましたかな」

大臣が彼に頼みごと？

「ああ、ダイの馬鹿息子をどうにかしてくれですか？下手なことをすると後々面倒ですしねえ。でも、何とか話はつけましたよ。ただ、条件が」

大臣が眉間に皺を寄せる。

「どういった内容で？」

将軍が声を落とす。

「いえ、大臣にとっては、かなりいい話だと思いますが。第一隊長殿とリナさんの縁組ですよ」

大臣が目をぱちくりさせた。

「うちの息子が、あそこの娘を気に入っているのは知っていたが。父親や兄弟にも似ず、とてもいい子なあ。でも、あそこの親父が首を縦に振る訳がないとあきらめて居たのだ。でも、どうやって？」

そ、そうだったのか。なんで急に縁談と思ったのだが。

「第一隊長殿の態度を見ていれば、嫌でもわかりますよ。ダイ殿には、単に巫女姫の婿選びの話をしただけです。息子さんを神官省に推薦してやると言えば、すぐに乗ってきましたよ。あと、ライバルが少ないほうが良いでしょう？と軽く揺さぶったら、すぐに了承してくれましたよ」

その言葉に、大臣も納得がいった様子で頷く。

「それならば、自分から喜んでいくだろうよ。女の尻を追いかけるしかない能無しだからな。それよりも、今度は神官省に迷惑がかからんのか？」

将軍が心配ないと請け負う。

「あそこの総帥を誰だと思っているんです？」

今度こそ、大臣は満面の笑みを浮かべた。

「うーん。あいつの前で難しい顔をする練習をせんといかんのう」
いい年したおっさんが、スキップしながら執務室を出て行った。

あのまま廊下ですれ違った人はびっくりするだろうなあ、と人事のように見送る。

「さて、今からわしは出かける。もう少ししたら、あるご一行様がお見えになるから、三九郎がお相手してくれ。で、わかったことをこの帳面に書き付けてくれればいい」

えーと？悩んでいる間に、机の前に座らされ（将軍専用の隣である）将軍は出て行った。

将軍が出て行ってしばらくすると、黄色い歓声と、甘ったるい香水の匂いが廊下から漂ってくる。

ま、まさか、こちらに来るんでは？

あたふたしながらも、その場所を離れるわけにもいかず。

しばらくして入ってきたのは、廊下から漂ってきた原因、いや女性達だった。

まさか、俺が呼ばれたのはこれが理由？確かに第一隊長なら気絶しているような状況だが。

大臣の同情の眼差しを思い出し、俺は引きつった笑みで女性達の相手をした。

地獄の訓練日 その5（後書き）

ちなみに大臣は、息子のライバルになりそうにない、第三隊長のことは、あまり気にしていませんが、息子はかなりライバル視しているようです。

早朝のお仕事 その1

うー。まだ、黄色い声と甘ったるい匂いが残ってる気がする。

今日は、早朝勤務の日だ。

昨日、將軍の生け贄にされた俺は、お城勤めの彼女達の話をもとめようと頑張ってみたのだが。

どうして、女って話があちこちに飛ぶんだ。

最初は、自分達は將軍のファンだと言ってたよな。

で、いい男の話に変わって。

で、お菓子の美味しい店の話になったと思ったら、流行の服の話になったり。

まとめるほうの身になってくれ。

でもまあ、ついだと思っ、先ほどの話題に出てたダイの息子の話を振ってみると。

「あんな男、さっさと辞めてしまえばいいのですわ」

「わたくしなんて、この前胸を触られましたのよ。あんな脂ぎった手で触られたら鳥肌が立ちますわ」

「そうそう。いつもなんか変な視線を感じると思ったらあいつです

の

女って、怖い。

俺が知っている、ダイの息子といえば、第二隊長なのだが、あいつは同じ隊長である、宿屋の娘の第六隊長と結婚している。

跡取り娘だったらしく、一応養子にはなっているが、ダイの取引先などが泊まることがあるらしい。

どちらかといえば、人当たりの良いおっとりとした性格だった気がするが。

そういえば、娘のリナも性格が良いと言っていたなあ。

同じ子供でも性格が全く違うということか。

「そういえば、裸王様に好きな人と結ばれるようにとお願いすると、叶うって噂がありましたよ」

「えー。私知らない」

「それなら、私も聞いたことがありますわ。なんでも、誰にも見つからないように恋文を渡すと、必ず届けてくださるんですって」

「でも、わざわざ素っ裸の男に渡さなくても良いのでは？」

「それがですね、必ずお返事がもらえるからだそうですの。」「く、まれにお断りされる方もおいでるそうですけど、でも、それは恋人がいるからとかそういう理由ですし」

「私も渡してみようかしら」

「そんな相手いらっしやるの？それよりも、夜中なんて家から出してもらえませんかよ」

「うーん。あ、そうだ、そのあなた、渡して頂戴」

お、俺？一応、俺、裸王を捕まえるのが仕事なんですが。

「それはいいわね。私もお願いしよう」

「私も。お願い」

さすがに俺の判断ではどうにもならないので、將軍に通信機で確認し、貰つとけとのことだったため、預かって將軍の机に置いて帰った。

ちなみに俺宛には全くなかった。

最初から期待していなかったから悔しくない。

人生、生きていると強くなるもんだ。

それより、今日の仕事、仕事。

早朝のお仕事 その1（後書き）

久しぶりに裸王様話題で登場。

早朝のお仕事 その2 (前書き)

クリスマス、滑り込みセーフです。

早朝のお仕事 その2

そういえば、今日は恋人達が一緒にすごす日だったのか。

元々、そんな習慣など、ジャポン国にはなかったのだが、北の国の出身でもある勇者がこの国にきてからこの習慣が広まったのだという。

正確には、開国してから、異文化がこの国にも広まったというだけなのだが。

勇者が広めたほうがロマンがあるということなのだろうが、当の勇者である將軍は知らないに違いない。

そのせいもあってか、早朝から何人かの恋人達が中睦まじく通り過ぎていく。

そんな中、俺は、街の警備をしていた。

通信機に入ってくる、連絡の声も、どこか浮かれている者も多い。

多分、今日の夜のことを考えてソワソワしているのだろう。

そんな折、切羽詰った通信が入ってきた。

「隊長！大変です。すぐに来てください」

呼ばれたほうにしてみると。

「何が起きているんだ？」

覆面を被った男達らしきものが、一組のカップルを捕まえ、なにやら喚いている。

「我々は、異文化の風習を断固拒否する！」

「異文化の風習に染まりきった者達よ、速攻で別れるんだ」

なにやら偉そうには聞こえるが、要するに恋人の居ない男達の集団らしい。

俺は、通信機を拡張器に切り替える。

「おーい、お前ら、他人の迷惑になってるぞ。第一、カップルはうじゃうじゃいる。一組くらい捕まえたところでどうにもならんぞ」

その気持ちはわかるが。と言いたいののはぐっところらせる。

「お前らに俺たちの何がわかるんだ！」

そつだ、そつだ、と声をそろえる覆面の男達。

うーん、あいつら盛り上がってるなあ。

もうすぐ昼が近くなってきたから、周りにだんだん野次馬が増えてくるし。

これ以上、通りを塞ぐのは辞めさせないと色々支障がでる。

「そうか。じゃあ、詰め所で詳しい話を聞いてやるつもりじゃないか」
そう言われて、はい、そうですか。などと彼らが言うわけもなく。

「いや、俺たちの要求を呑まないと、ここから動かん」

そつだ、そつだ、と続く覆面の男達。

あいつら、練習したのかというくらい揃っているな。

いや、同じ気持ちがりうさせるのか？

まずは、ここから移動させないと。

通信機でこつそり女性隊員達を呼び寄せる。

「お前ら、今おとなしく来るなら、女性隊員が相手にする。抵抗するなら、強制的に引つ張るぞ」

覆面の男達の何人かがびくつとなつた。

その隙に、覆面の男達に捕まっていたカップルが逃げ出した。

あと一押し。

「どうする？うちの女性隊員は数が少ないからなあ。早いもの勝ちだぞ」

覆面の男達の何人かが俺たちの方に走つてきた。

主犯格の男が喚いているが、こうなると崩れていくのは早い。

あっという間に、全員を捕らえることが出来た。

詰め所で、他のものは隊員に任せ、俺は、主犯格の男を担当する。

「お前、気持ちは判るが、あれはいかんぞ」

最初は警戒して、頑としていた彼だったが。

俺と話をしているうちに、だんだん心を開いてくれ、ぼつりぼつりと事情を話し始めた。

最後になると、彼の視線が、なにやら同情めいていたのは気のせいに違いない。

そうそう。後日談ではあるが、うちの女性隊員に取調べを受けた何人かの男達が、新しい趣味に目覚めたらしい。

その趣味が何であるかは、あえて伏せたいと思う。

早朝のお仕事2

街は昨日の事が嘘のように、静けさを取り戻していた。

早勤務二日目とはいえ、このギャップはすごいな。

恋人達の行事の後は、新年を迎えるための準備に追われるわけで。

市場の商品も、それらしいものへと変貌している。

「なあ、今度の新年行事、姫巫女様が顔を出すらしいな」

毎年、新年にはお城と神殿で新年行事というものが行われる。

神殿では、初めて公の場に姫巫女が姿を現すらしい。

今日、正式な発表が新聞に載っていたらしく、そんな話題もちろほら聞こえる。

姿は、母親に似ているとの噂があるので、美人なんだろう。

俺には雲の上すぎて縁のない話だが。

そんな折、通信機に將軍からのメッセージが来る。

「あー。三九郎。仕事が終わったら、わしの所に来るように」

少し疲れたような声なのは気のせいだろうか。

將軍のことだから、仕事が忙しかったに違いない。

「了解しました」

今日は、さすがに何事もなく仕事を終え、將軍の元に行った。

「お、来たか。紹介しよう、こちらに居るのが、神告の神殿で総帥をしているバードだ」

そういえば、総帥も勇者の一行だったんだよな。

勇者がジャポン国を守るために、この国に留まったのなら、総帥は巫女を守るために留まったという。

「よろしく。なるほど、彼なら心配ないというのも頷けますね」

一見冷たげな容貌なのだが、物腰といい物言いいいものすごく優雅である。

しかし、男前だよな。

神殿で影のように働いているには勿体無いほどの。

彼が絵本のモデルならおそらくほとんどの人が納得するに違いない。

などと、拉致もないことを考えていると、呼ばれていることに気がつかなかった。

「おいおい。大丈夫か？」

將軍の声に我に返る。

「すみません。考え事をしてまして」

恐縮する俺に、將軍は鼻先で笑っただけだった。

「どうせ、わしより、総帥のほうが勇者らしいとかそんなことだろ
う」

凶星を突かれて、ぎよっとしている俺を見て、総帥も横で笑っている。

「イグナートの場合は、ワザとそんな格好をしているんですよ。本
気になればわたしなんかより男前のはずなんですけど。女性よけの
ためとは言え、ねえ？」

一瞬、本気になった將軍を見たいと思っってしまった。

危ない俺、男だぞ。

「そんな肩のこるようなことだれがするか。そうそう三九郎、お前、
明日遅番だったよな」

はい。と返事をする俺。

「じゃあ、明日、姫巫女様が荷物を城に届けにくる。お前は姫巫女
様を城までご案内しろ」

え、ええええええええ。ちょっと待った！そういう仕事は騎士とか
そっという者がするんでは？

「今までは、騎士に任せておったのだがなあ。姫巫女の婿選びの話が本格化してから、皆浮き足立って仕事にならんよ」

それは判るんですが。なぜ、俺？

「お前、一応礼儀作法の訓練受けてるだろう？」

そういえば、隊長になるときに徹底的に仕込まれた。

他の隊長たちとは違い、俺はスラム出身である。

人一倍これに関しては苦勞した記憶がある。

「警備の仕事に身分差なんてないだろう。何事も経験だ。やっつけ」
俺に拒否権などなく。帰ってから盛大にこのことを後悔するのであった。

姫巫女様の護衛 その1

今日の仕事を終える頃には、大通りにも人がほぼ居ない状態になっていた。

なぜ、こんなに大通りが広く真っ直ぐに作られているのか、疑問に思う人も多い。

しかも、日中は市場で賑わうが、夜には撤収しなければならない。

ただ、理由を聞けば納得するだろう。

神告の巫女の龍が通るからだ。

龍、というのは巫女にしか扱えないらしい。

世界のあちこちに、姿かたちは違うものの存在しているが、そのどれもがそれぞれの巫女に仕えているらしい。

らしいとしかいえないのは、俺自身が龍を見るのが初めてだからで。

普段、目くらましの魔法でその姿を捉えることはできないが、今日の俺は案内役なのだ。

その姿を当然見ることが出来る。

月の光を浴びてきらきらと光る鱗は、宝石が空を飛んでいるようだ。

「すげえ。龍ってこんなにでかったのか」

おそらく、百人ほどの人が乗っているだろう。

それすらも余裕に感じさせるほど、その体は大きかった。

その巨体がゆっくりと下降してきて、大通りに降り立つ。

どうやって籠から降りるのだろうかと思っていると、浮遊の魔法でゆっくりと降りてきた。

それと同時に籠自身も大人二人分ほどの大きさになり、おそらく姫巫女が乗っているだろう、輿に寄り添うように立った。

俺も、真新しい制服に身を包み、精一杯のおしゃれをして挨拶を述べる。

「わたくしは、三九郎と申します。このたびは、姫巫女様の護衛をさせていただきます」

少々違っているかもしれないが、こっちも緊張しているんだ。

多少、多めにみてほしい。

なんとか無事に、城の謁見の間まで案内する。

そこで、姫巫女は輿を降りるらしい。

まさか、俺がエスコートするのか？誰も動かないということとは、マジで？

女性のエスコートってどうしたっけ。

四苦八苦しなから、なんとか姫巫女の手をとる。

衣を頭から被っているの、姿ははっきり見えないが、どこか違和感を感じる。

んー。なんでだろう。

そんな様子が顔に現れていたに違いない。

「なにか？」

小首を傾げて聞いてくる、姫巫女。

その様子に、思わず俺は尋ねていた。

「どこかでお会いしたことあるような気がしまして。気のせいなのは判っているのですが」

姫巫女が衣を外す。

当然のことながら、顔に見覚えはない。

気のせいだよな。と思いかけたとき、姫巫女が、ふふっと笑う。

「流石、将軍が目をかけているだけのことはありますね」

一瞬変わった声を聞いた俺は、悲鳴を上げる寸前で抑える。

「そ、そ、そ、総帥!!」

総帥は巫女の影。そう聞いてはいた。

でも、まさか姫巫女に化けるとは。

彼の変装は完璧で、普通なら誰も気がつかない。

でも、俺にだけ感じた違和感。

もしかして、俺、試されていた？

「詳しい話は、あとで。今は任務を済ませましょう」

総帥は、姫巫女らしい声と笑みで俺に先を促した。

姫巫女様の護衛 その2

謁見の間では、国王が居て、後ろには魔道具の責任者でもある大臣が控えていた。

それが意味するところは、姫巫女が、魔道具の基礎でもある勾玉を持って来たと言うことだ。

俺は、姫巫女（あえてこう呼ぶ）を中央まで案内すると、そそくさと入り口に控えた。

姫巫女は、そのまま国王の前まで進み出る。

そして、懐から袋を取り出すと、国王にそれを手渡す。

国王から大臣に、袋が手渡され、大臣が中身を確認して、頷く。

それを合図に姫巫女が下がり、ここで謁見は終了。

そのまま、俺は、姫巫女を將軍の執務室に案内した。

ここまでは打ち合わせ通り。

俺も任務を終え、下がるうとすると將軍が呼び止めた。

「三九郎。お前も残れ」

俺が残る理由はないはず。失礼なこともしないはずだ。

「あなたにも関係ある話ですよ。年明け早々より、姫巫女の婿探し
が本格的になります。ということは、公の場所にも度々出る必要が
ある訳です。だからといって必ずしも安全な場所に行くとは限らな
い。ですから、わたしが身代わりになる機会も多々あるでしょう。
今までは、総帥であるわたしが護衛を勤めてまいりました。流石の
わたしも一人で二役はできません。だからといって、姫巫女が一人
でウロウロする訳にもいきませんから、代わりの護衛が必要になる。
実は、前々からあなたはどうかと將軍から打診がありまして、今日
試させて頂いたのです。どうでしょう、引き受けて頂けますか？」

隣で將軍が頷いている。

いつの間にか話が出来ていたらしい。

しかも、これは、俺にとってはかなりの大出世と言える。

本当はすぐにも引き受けるべきなんだろう。

しかし、自分の中で迷いがあるのも事実。

「考えさせて下さい」

俺はそれだけ言うのが精一杯だった。

隊長のお悩み

「隊長、どうしたんっすか？」

多分、今日の俺はかなーりおかしかったに違いない。

隊員が心配そうにちらちらこちらを見ている。

「いや、なんでもないといいたいんだが。そうだな、今日皆集まれるか？」

昨日、あれから散々悩んだ。

どうせ悩んでも答えが出ないんだ、誰かに相談したっていいじゃないか。

それに、隊員たちにも関係あることだし。

「判りました。皆に伝えます」

班長達が駆け出し、今の伝言を伝えたに違いない。

俺は、頭を切り替え仕事に集中することにした。

「隊長、お疲れ様でした」

俺たちの寮にある食堂で皆が集まる。

ここに全員集まるのはめったにないことなので、ちょっと圧迫感が

ある。

だが、かえってそれが俺をリラックスさせる。

「今日、皆に集まってもらったのは、俺の相談に乗ってもらいたいからなんだ」

どう切り出すべきか考えたが、今の俺が取り繕ったところで意味がない。

「今、俺に出世の話が来ている。詳しいことは機密なので言えないが、そうなるとう当然、皆と一緒に居られなくなる」

話をしているうちに涙が出そうになる。

泣くのは流石に俺のキャラじゃないので、ぐっところえ、出来る限りたんと俺の気持ちを吐き出す。

「隊長、要するにおれらと別れるのが嫌じゃなくて、裸王と別れるのが嫌なんしょ？」

ああ？間抜な返事に隊員たちがどつと笑った。

「隊長お、アタシにはあ、裸王へのお、愛の告白にしかあ、聞こえませんでしたあ」

おいおいおい、相手はマッチョなおっさんだぞ。

俺にはそういう趣味はない。

女に縁がないことは認めるが。

「どうせ、明日夜勤なんしょ？だったら実際告白したらどうっすか？」

きゃああああ、と悲鳴を上げる女性隊員たち。

まてまて、どこでそういう話に変わった？

「それ、いいんじゃないですか？俺たちで作戦練りましょう。」

おーい。俺の意見は？

駄目だ。完全に蚊帳の外である。

ここまで隊員が一致団結したのは、おそらくこれが初めてに違いない。

もしかしてこいつら、俺が居ないほうがいいのか？

いかん、だんだん本気で落ち込んできたぞ。

部屋の隅っこでいじけていると、C班長がよってきた。

「隊長、そんなにいじけないでくださいよ」

俺だって、好きでいじけているんじゃないぞ。

「そうそう、皆、隊長が好きなんですから」

反対側にA班長が来た。

「やっぱり俺が居ないほうがいいんじゃないか」

いかん。俺も大人気ない。

「そんなことある訳ないじゃないっすか。俺たち皆隊長に拾われたんっすから」

いつの間にやら皆が俺の方を見ていた。

「いや、俺はある人の真似をしただけで」

そう、俺も拾われたくちなのだ。

そのときの感覚が忘れられなくて、自分もそんな風になりたくて。

誰かに人真似だと笑われたこともあるが、そのときは鼻先で笑い飛ばした。

この感情は、同じことをされたものにしか判らない。

「それでも、助けられたのは事実です。ですから、恩返しをしたいと思うのは当然でしょう?」

最もこういうシリアスなのは、俺に似合わない。

「お前ら、自分で作戦立てたからには責任もって行動するよつに」

だから、これは俺の精一杯の強がり。

「了解しました」

隊員たちは、それぞれ自分達の準備に解散していった。

俺も、今日は疲れた。明日に備え早々に寝ることにしよ。

隊長のお悩み（後書き）

このままいくと、年内に一区切りつきそうです。
さて、裸王視点に切り替えるか、このまま隊長に頑張ってもらおうか
悩むところですよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2093z/>

裸の裸王様

2011年12月29日01時51分発行